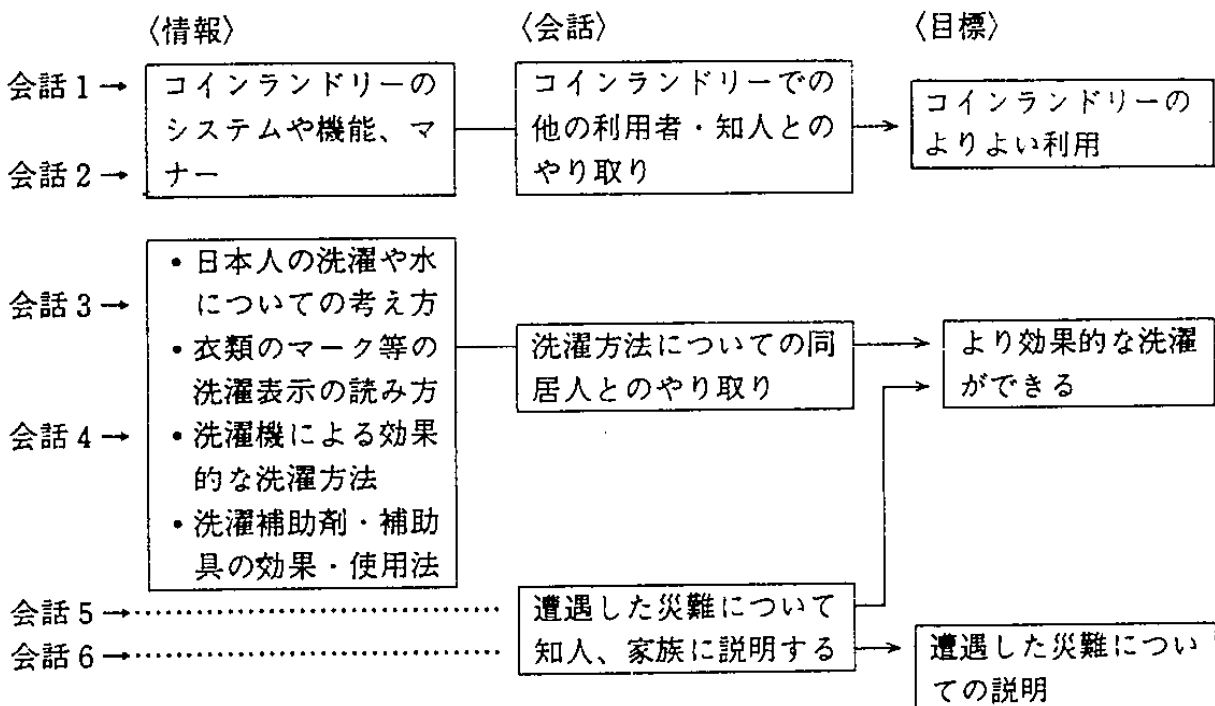


第4課 洗濯

● この課の目標と重点

- ① 洗濯に関する助言を求めることができる。
- ② 洗濯に関する助言を聞いて、それを受け入れることができる。
- ③ 自身の遭遇した災難の状況について尋ねられたとき、説明することができる。
- ④ コイン・ランドリーのシステムやマナーを理解し、利用することができる。

● 課の構成と各会話の関連



〔会話－1〕毛布を洗いに行く——コインランドリーで

行動達成目標

使ってもよい洗濯機かどうか、出してもよい洗濯物かどうかなど、判断しにくい状況で、他の利用者と適切なやり取りをすることで、気持ちよくコインランドリーを利用することができる。

知識

コインランドリーのシステム、機能とその利用のマナーを知る。

表

- ① 上記の状況で適切な質問ができる。 → ここ、使って(い)ますか。

現	これ、どなたのでしょうか。	
	②	上記の状況で尋ねられたとき、適切な応答ができる。
	③	許可を求める表現が使える。 → 出してもいいですか。
	④	③の問いに適切に応答できる。 → いいと思いますよ。

● 指導の前に

コインランドリーは、お金を入れるだけで用が足り、店員との応対もなく済む気楽さがあるが、その分、利用者同士が気持ちよく利用するためのルールは守らなければならない。また、コインランドリーには、地域の住人がやって来る社交場としての機能もあるため、そこでの社交上のマナーも理解している必要がある。

コインランドリーのない地域では、〔会話－1, 2〕は学習する必要はないが、レベルⅡ、Ⅲの学習者には、時間に余裕があれば、一般常識として、その利用方法やマナーを説明しておきたい。

なお、〔会話－1, 2〕は、洗濯についての日本人の通念や洗濯機の使用法をある程度理解してから学習すると、マナー等も理解しやすいと考えられるので、先に〔会話－3～6〕を学習した方が効果的だろう。

● 準備

- ① 教室をコインランドリーに見立てるための小道具（洗剤／洗濯機にする大きな箱／洗濯物のタオル／かご等）を用意しておく。
- ② 「使って（い）ますか」の練習に使う種々の道具類（はさみ／定規／ドライバー等なるべく学習者が日常使っているもの）を用意しておく。

● 授業

【1】導入

① 会話場面について話し合う

コインランドリーを利用した経験の有無を尋ね、この会話と同じ状況を経験した者がいれば、そのときどう対処したか話させる。この導入部での話し合いは、なるべく日本語で行いたい。レベルⅠの学習者でも何を話す場なのか理解できれば、身振り手振りを交え、単語を並べて話すことはできる。何を話す場なのかを理解させるのは、中国語のできない教授者も、教科書の該当部分を指すか、テープを聞かせたり、筆談や絵をかく

ことなどによって、ある程度は可能である。

② コインランドリーのルールやマナーを説明する

このとき、教室内にコインランドリーに見立てる小道具を使って模擬店を設置し、実際に洗濯物を出し入れするなどして実際に近い形で行うと、効果的である。また、頻繁に利用している者に説明させて、教授者がそれを補う方法もとってみたい。

③ 会話の流れを理解させる

会話部分のテープを聞かせて、会話の流れにかかわることがらについて理解をチェックするための次のような質問をする。

例 ・林夫人が使おうと思った洗濯機の上に何があったのか。

- ・結局その洗濯機を使えたのか。
- ・中に何が残っていたのか。
- ・それはだれのものだったのか。
- ・それをどう始末したのか。

*日本語の会話を聞いても理解できない学習者には、中国語部分を聞かせる。質問もできれば中国語で行う。最大の目的は、これから練習する会話の流れを、とにかく把握させておくことであるから、場合によっては教科書の中国語訳の部分を読ませるなどの方法もとてもよい。

予習を十分してきている学習者と教授者の二人で、会話を演じてみせることができれば、非常に効果的である。

【2】展開

① 洗濯機が空いているかどうかを確認する問答の対話練習をする

まず「ここ、使って（い）ますか」が滑らかに言えるまで発話練習をする。その後、各学習者がこれから洗濯する衣類と洗剤の箱を持って模擬店を訪れ、一人ずつ順に洗剤の箱を隣の洗濯機の上に置いていき、次にやって来た者と会話番号1, 2の部分を使ってロールプレイをする。

② 残っている洗濯物の所有者についての問答の対話練習をする

所有者の分からない品物を幾つか渡して、「これ、どなたのでしょうか」と「さあ」を学習者同士で問答させる。中に所有者の明らかな物も混ぜておき、「～さんのです／～さんのじゃないですか？」等を使った適切な応答もできるようにしたい。

*レベル1の学習者は「これ、だれの？」でもよい。

*「さあ」のほか、「うん」等返答の難しいときの答え方も与えておきたい。

③ 「出してもいいですか／でしょうか」の問答の対話練習をする

この文は、許可を求める「～てもいいですか／でしょうか」という文型であるが、この文型の練習 4-1, 2 (教科書 P 122 ~ 123) は、ランドリーの場面練習と別に時間を設けて行う。(練習方法については、【4】を参照)

ただし、この文が許可を求めている文であることは理解させる必要があるので、説明 4 (教科書 P 122) を参照させるなどして説明しておくといよい。

*場面の練習は、文型・文法をマスターするためのものではなく、その場面での行動能力をつけるためのものである。このことを学習者に自覚させておかないと、学習者が文法にとらわれてしまい、練習の目的が果たせなくなってしまうので注意したい。

この文に対する応答の部分の日本語の意味も説明 4 (教科書 P 122) を読ませるなどして理解させてから、二人ずつ対話練習をさせる。

*レベルⅠの学習者は「出します。いいですか?」またはジェスチャーを用いながら「いいですか」と言えればよい。応答の方も「いいです」が言えればよい。

【3】総合

① 会話全体を通して場面練習する

洗濯機代わりの箱全部の中に洗濯物を入れておき、模擬店に次々と客がやって来るという設定で、教授者が一人ずつ学習者を送り出しながら場面練習をする。この練習の目的は、実際にこの種の状況に臨んだときに、自分の意図する行動を達成できることである。文法的な正確さを要求する必要はないが、一般の日本人に発話者の意図が適切に伝わるように練習をする。

コインランドリーで、【会話-1】とは違う状況で困ったことのある学習者がいれば、そのときどうすればよかったかについて話し合い、その会話を使ってロールプレイを試みる。

【4】応用

① 「使って (い) ますか」の応用練習をする

この表現は、コインランドリーだけでなく、職場や学校でも使える便利な表現であるので、ぜひ定着させたい。また、こう問われたときの適切な応答もできるようにしておく

たい。練習としては、学習者の日頃よく使っている道具を机や床の上に置き、次のような会話をさせる。

例 A：（道具を取り上げながら、そばのBに）これ、使って（い）ますか。

B： あ、あいてますよ。／だれも使ってないみたいです。／あ、今使ってるんです。

A： じゃ、ちょっと借ります。／じゃ、後で借りていいですか。

＊このとき、Bの役にレベルⅡ、Ⅲの学習者を当てて、臨機応変に答えさせる。Aの役にレベルⅠの学習者がなった場合でもBの返答を正しく聞き取れるようにさせたい。

次の段階では数種類の道具を同じところに置いておき、自分の欲しい物を「この（はさみ）使ってますか」のように特定する練習も行いたい。

② 許可を求める「～てもいいですか／でしょうか」の応用練習をする

この文型も、コインランドリーという場面を離れて使えるように練習させたい。文型の意味を確認してから、許可を得る必要のある状況をいろいろ設定し、そのときどう言うかを言わせる。

＊言葉による設定例：ここに、りんごがあるとします。そばにそのりんごを買ってきた人がいます。このりんごを食べたいとき、何と言ってその人に聞きますか？

言葉で状況を設定するより、絵カードや写真など、見てすぐ理解できるもので示した方が効果的な場合が多い。練習4－2（教科書P123）の絵カードや写真などを使って行くと効果的である。「～てもいいですか」の形がスムーズに出てこなければ、第1課の〔会話－5〕【3】②（P35）等に戻って練習する。

余裕があれば、「～ですか」と「～でしょうか」の使い分けの練習をする（特にレベルⅢの学習者）。説明3（教科書P121）で用法を確認した後、相手の許可を得たい場合と、相手の考えを聞きたい場合の具体例をいろいろ与え、どちらかの表現で質問させる。

＊設定には次のようなものが考えられる。相手の所有物の始末について聞く場合と、第三者の所有物の始末について聞く場合等。

例 相手の持っている本をちょっと見せてもらいたいような場合と、相手の物ではない本が相手のそばに置いてあるような場合。

〔会話－２〕 雨の日に——コインランドリーで順番を待つ（２）

行動達成目標	
混んでいるコインランドリーで、他の利用者と適切なやり取りをすることで、気持ちよくコインランドリーを利用することができる。	
知識	天候や時間帯によるコインランドリーの利用状況について知識を得る。
表現	① コインランドリーで近所の人と会った場合、挨拶ができる。
	② 順番を待っている人がいる場合、相手 → 今すぐ終わりますから。 への気遣いを表す表現が使える。 お待ちどおさま／あきましたよ／ お先に
	③ ②に対して適切に応答できる。 → どうぞ、ごゆっくり。

● 準備

- ① 〔会話－１〕の小道具のほかに椅子や雑誌等を用意しておく。
- ② 洗濯の残り時間を知らせる練習に使う文字盤の模型を用意しておく。

● 授業

【１】導入

① 会話場面について話し合う

まず、コインランドリーがどういう時間帯や天候のときに混むか、教授者が補足しながら話し合う。次に、混んだコインランドリーで待たされてイライラした経験やその逆に待たせた経験の有無について話し合い、そのときどう対処したか、あるいはどう対処すべきだったかについても話し合う。そして、こうした場面では言葉がうまく出てこなくても、ただ会釈するだけでもイライラを解消することができる場合もあり、とにかく何らかの手段でお互いのコミュニケーションを図ることが重要だということを理解させる。

② 会話の流れを理解させる

会話部分のテープを聞かせて、理解を確認する。質問としては、次のようなものが考えられる。

- 例
- ・林夫人が店に行くと、店にだれがいたのか。
 - ・佐藤夫人の洗濯はいつ終わるのか。
 - ・林夫人は待つ間、何をしていたか。
 - ・佐藤夫人は何とあいさつして帰って行ったか。

【2】展開

① 出合いのあいさつのやり取りを練習させる

会話番号1～3のやり取りをする。一人ずつコインランドリーの模擬店に入り、次にやって来た者とあいさつを交わしていく。レベルⅠの学習者は「お宅もお洗濯ですか」「今日は混んでいますね」等と言えなくても、適当なあいづちだけでも打てるように練習する。

*レベルⅢの学習者には雨以外の場合のあいさつも適切に使わせたいので、天候等を指定して言わせる。

② 待たせていることの断りとその応答を練習させる

待たせるときの表現として、教科書は「今すぐ終わりますから」と言っているが、このほか、もう少し時間がかかるときの「あと～分ぐらいですみますから」等の表現も使えるようにしたい。練習方法の例としては、洗濯機の時間表示盤の模型を作り、教授者が適当にこれを動かして残り時間を知らせ、学習者に発話させる等が考えられる。この練習が済んだら、それに対する応答の「あ、そうですか。どうぞ、ごゆっくり」の発話練習もした後、ロールプレイをする。

*レベルⅠの学習者は「あと～分です」または「もうすぐです」だけでも相手に伝えられればよい。

③ 洗濯を先に終え、帰るあいさつの練習をする

発話練習をしてから、会話番号6～8を対話の形で練習する。特に人間関係を保つ上で「お先に」と一言断ることが大切だということを理解させる必要がある。あわせて頭を下げる等の行動も練習する。

【3】総合

① 会話全体を通しての場面練習をする

模擬店の洗濯機を一つに減らし、まず一人を洗濯に入らせる。続いてもう一人入らせて、〔会話－2〕のようにやり取りをさせる。初めの一人が出て行ったら次の一人というようにして、全員で場面練習をする。

② コインランドリー場面での総合練習をする

模擬店に入る順序や役割を決め、〔会話－1, 2〕を通して場面練習をする。

*このときは箱が多い方が本物らしくてよいだろう。実際にランドリーを利用している者が多い場合、条件が許せば本当のランドリーでの実習も試みたい。

【4】応用

① コインランドリー以外の場面のロールプレイをする

コインランドリーに限らず、使う順番を待つことは、職場や学校でよくあるので、そうしたときにもこの会話で学習したことが生かせるようにしたい。練習としては、学習者が共同で使っている道具（ほうき、モップ、掃除機等）があれば、それを実際に使って「お待ちどおさま／お待たせしました」「どうもすみません」のやり取りを二人ずつ行う等が考えられる。

〔会話－3〕助言を求める（1）

行動達成目標	
① より効果的な洗濯方法について、助言を求めることができる。 ② 受けた助言を聞き取り、それを受け入れることができる。	
知識	① 衣類についている洗濯表示マークの意味を理解する。 ② 洗濯機の効果的な使用方法やその他の種々の洗濯方法を知る。 ③ 洗濯補助剤の種類とその効果的な利用方法を知る。
表現	① 困っている状況を説明するという形の →（きれいにならない）んですけど。助言を求める表現が使える。 ② 助言を与える表現を理解できる。 →（手で洗っ）てみたら？ ③ 相手の助言内容を聞き返して確認できる。 → 何ですか／何をですか／～って何ですか等の疑問詞の使用 ～ですか／～ですね

● 指導の前に

一口に洗濯と言っても、手洗いから洗濯機利用、さらに種々の洗濯補助剤の使用まで、様々な方法があり、適切な方法によらないと効果的な洗濯ができない。この会話は、同居人等に適切な方法について助言を求めることができるようになるのが目的であるが、同時に自分でも適切な方法についてある程度の知識を持っていたい。衣類の洗濯マークの読み方や、洗濯機・洗剤補助剤の使用法なども指導したい。

また、この会話は帰国者から同居人に助言を求める場面であるが、洗濯の仕上がりについて、同居人の方から帰国者側に注意をする場面も考えられる。そのときにその注意を聞き取り、ある程度受け入れていくことも、人間関係を保つ上で必要である。できれば、こうした場面での会話も学習させたい。

ただし、こうした指導に当たっては、日本と中国の気候・風土の違いから洗濯の習慣にも異なる点があることを教授者も知っておきたい。帰国者が時に洗濯をしない衣服を長く身に着けていることがあるとすれば、それは、気候が乾燥していて、水も貴重であるという中国東北部の風土的条件から来る習慣によるものであることが多いと考えられる。いきなり気候・風土の異なる日本にやって来て、すぐ日本の洗濯の習慣に慣れるのは難しい場合もあるだろう。しかし、もし帰国者が、日本に来てからもずっと中国での習慣に従って、長く洗濯をしない衣服を身に着けていたとしたら、それは衛生上の問題ばかりではなく、付き合っている日本人に「不潔」という印象を与え、対人関係で帰国者が損をする原因にもなりかねない。もしもクラスの中に、なかなか日本の習慣に慣れない帰国者がいたなら、最低日本での「清潔感」だけは理解させたい。

なお、〔会話－3〕は期待した仕上がりにならなかった場合、〔会話－4〕は予想外の結果に終わってしまった場合の助言の求め方と分けて練習する。

● 準備

- ① 襟や袖口などの汚れの落ちていない衣類やしみの残っている衣類を数点（学習者にも汚れが落ちなくて困っている衣類があれば持参するよう指示しておく）を用意しておく。
- ② 衣服の部分（襟、袖口等）や洗濯道具・方法に関する語彙表（事前に渡して、暗記しておくよう指示しておく。ただし、レベルⅠの学習者には困難なようであれば、ここまで要求しなくてもよい。また、レベルⅡとⅢの学習者でも語彙数を加減するとよい）を作しておく。
- ③ （できれば）種々の洗濯補助剤（漂白剤や柔軟仕上げ剤等）や特殊な洗剤の実物を用意しておく。
- ④ 衣類についている洗濯マーク・表示の拡大絵カードを用意しておく。
- ⑤ 【5】の①で使う会話テープと絵カード。

● 授業

【1】導入

- ① 会話の流れを理解させる

〔会話－3〕のテープを聞かせて、内容理解のチェックを次のような質問をする。

- 例
- ・洗濯物は全部きれいになったか。
 - ・汚れが落ちなかったのは、どの衣類のどの部分か。
 - ・夫人はだれに助言を求めたか。
 - ・その汚れは洗濯機で落ちる汚れか。
 - ・どうすれば落ちるのか。

② 会話場面について話し合う

教授者が用意した衣類を提示し、洗濯機で洗濯してみたけれどもきれいにならなかったことを説明して、こういう場合どうすればよいかを学習者に尋ねる。適当な方法を知っている者がいなければ、では、だれに聞けばよいかという方向へ話をもっていき、この会話を練習する動機付けを行う。適当な方法を知っている者がいた場合は、その方法を説明させる。

*もしも、クラスのほとんどが、その汚れを気にしていないようなことであれば、「指導の前に」のところで述べた説明をして、日本的「清潔感」をある程度は理解させてから、この会話の練習に入らなければならない。

【2】展開

① 助言を求める練習をする

まず、用意した衣類のいろいろな部分を指して、「ここは？ きれいになった？ きれいにならない？」という質問に答えさせる練習をして「きれいになった／ならない」が使えるようにする。

*レベルⅠの学習者でこれが困難な場合は、「きれい」「きれいじゃない」が言えればよい。

次に「～んですけど」という表現が、その後の「どうすればいいんでしょう」などが省略された形で、これだけで助言を求める表現になることを確認する。口慣らしの後、衣類を持たせて、「どこがきれいにならないんですか？」と聞き、「ここがきれいにならないんですけど」と指さしながら答えさせる。

*レベルⅢの学習者には、「ちっとも」のほか、「あんまり」「全然」「少しも」や地域の方言の副詞も使わせたいので、できれば語彙表にこれらの表現も付け加えたい。

② 相手の助言を復唱することで、相手に聞きとった旨を伝える練習をする

衣類（できれば各自持参のもの）を持たせて、①の方法で教授者に助言を求めさせて教授者は「～てみたら」の形で答え（練習3-1（教科書P 129）のキューなどを使えばよい）、学習者にその助言内容を復唱するよう指示する。

例 「手で洗ってみたら？」→「ああ、手で」

③ 助言が聞き取れなかったとき、聞き返す練習をする

助言を聞いてすぐ理解できない学習者には聞き返しや言い換え等の練習が必要である。その方法としては「～で洗ってみたら／～に聞いてみたら」等練習3-1の答えの文を使い、「～」の部分をおぼろげと学習者に理解できない程度に早口で言い、学習者に聞き返させる。

*この練習に必要な「洗ってみたら／聞いてみたら／使ってみたら」等の表現を学習者が聞いて理解できない場合は、中国語訳などで事前に理解させておく必要がある。

学習者は、「え？ 何ですか／だれにですか」など、分からない箇所を取り出して聞き返し、教授者は助言を繰り返す。

*レベル1の学習者は、疑問詞で「何？／だれ？」と聞くことができればよい。

ここで聞き取れたら、今度は「ああ、～ですね」と②と同様に復唱する。

④ 助言内容を理解できないときに聞き返す練習をする

助言を音としては聞き取れても、それが何のことか理解できない場合も多い（特に商品名など）。そこで、そういう場合に「え？ ～って何ですか／～って？」などと聞き返すが必要になる。この練習としては、助言の「～」の部分に学習者が知らないと思われる商品名などを入れた助言を与え、聞き返させる。学習者が聞き返してきたら、教授者は一般の日本人ならこう言う換えるだろうと考えられるような形で答える。学習者が理解できるまで、この過程を繰り返す。

例 先生： ソフロンを使ったら？

学生： ソフロン？ ソフロンって？

先生： ああ、洗濯物の仕上がりを柔らかくする洗剤なの。ほら、このぐらい（ジェスチャー）の大きさにプラスチックの入れ物に入れて……

*重要なのは助言内容の理解であるから、そのためには日本語以外のどんな媒体を使ってもよい。一般の日本人同士でやるように字や絵をかいたり、実物を持って来ることをしてもよい。

⑤ 「～ではだめ／～でもいい」の練習をする

この過程は④に含まれるときもあるが、〔会話－3〕の「あ、洗濯機ではだめなんですね」のように与えられた助言を自分なりに解釈し直して、「その助言は、言い換えれば、こういうことなのですね」と確認すると、自分の理解度を一層はっきりその助言者に伝えることができる。しかし、これは人工的に作った会話の流れの中で無理に言わせる練習をしても効果がないので、ここでは、「～ではだめ／～でもいい」という形の定着までを目的とした練習（〔会話－3〕の流れに沿って言うことは要求しない）をする。①～④の方法で助言を聞き取った学習者に、教授者の「じゃあ、これは、洗濯機でもいいんですか／洗濯機ではだめなんですか」という問いに答えさせる。

*このとき、「～ではだめ／でもいい」と板書するなどして、形を意識させる。

*レベルⅠの学習者には、これが苦しければ、「～、いい／だめ」だけでも言えばよい。

「洗濯機」の代わりに「水」「ふつうの洗剤」等を使った状況を設定する。ただし、例えば〔会話－3〕の例で言えば、「手でもいい」と言うと、意味が変わってくるので、学習者が誤ってこちらの表現を出した場合は説明が必要である。

【3】総合

① 助言を受ける過程を通して練習する

一人ずつ衣類を持たせ、助言者（教授者）と会話をする。このときの重点は、㊦どこがきれいにならなかったのかを伝え、㊩助言された内容を聞き取り、㊪その内容を理解したことを助言者に伝えることができることの3点である。助言内容は、実際にその衣類の汚れを落とす助けになることを言わなければならないが、家事に携わっていない教授者にはこの課題は負担かも知れない。そういう場合は、できればだれか洗濯に詳しい人をボランティアとして依頼して、その人に「助言を求める」という実習の時間を設ける。これは、いつも聞いている教授者とは違った日本人の声に接する機会ともなり、学習の成果を試す上でも効果的だろう。このとき、学習者の求めに応じた助言だけでなく、効果的な洗濯についての話もしてもらい、それを聞き取る練習もできれば更によい。

*ただし、このときは、あらかじめそのボランティアの人に個々の学習者のレベルについて説明し、特にレベルⅠの学習者への配慮を要請する必要がある。

② 洗濯機の効果的な使用方法や補助剤の効果などの知識をまとめる

ここまでで、予備知識のない帰国者も洗濯に関する助言を求めることができるようになったとして、いったん、今までに得た情報を整理させておきたい。「こういときはどうするか」という質問をいろいろな場合について出し、学習者の理解を確認するか、実際に洗濯機を動かしたり、補助剤を示したりしながら、学習者に「これはどうする」「この次は？」という形で聞いてみる。

*洗濯機の使い方を知らない者がもしも多いようなら、洗濯機の実習が必要である。

【4】関連（洗濯表示・マークの読み取り）

① マーク・表示に関心を持たせる

衣類についているマークやラベルを示し、これらを知っていたか聞く。また、各々、持参した衣類や着ているもののラベルを確かめさせる。次にラベルと生地を示しながら、材質を表す語彙（綿、麻、ポリエステル等）を導入するとともに、各材質の特徴も簡単に説明する。

② 個々のマークの意味を導入する

マークの拡大図を示して、何を意味するマークかまず考えさせてから、教授者からマークに即してアイロンや水洗い等ができるかどうかを尋ねる。：学習者のレベルに応じて「いい／だめ？」「できる／できない？」「かけられる／かけられない」「かけてもいい／かけちゃだめ？」等の表現を使って質問をする。

*抽象的なマークはレベルⅠの学習者には分かりにくいことがある。ある程度、抽象化の過程を説明し、マークを指して○×の意味を「いい／だめ」と言うぐらいはできるようにしたい。

もしも、動詞の可能形が定着していなければ、説明1と練習1－1, 2（教科書P197～198）を利用して、洗う／アイロンをかける／干す等の動詞を可能形に変換する練習を先にする。

*レベルⅠの学習者は、「洗える」という音を聞いて該当する絵カードを指すなど聞いて理解できることを目標に反復練習をさせる。表現する方は「洗う、いい／だめです」でよい。

③ 衣類のマークを見て、洗濯法を考えさせる

実物の衣類のマークを読み取らせる。できれば材質名も言わせる。

④ マークや表示を見て助言を与える会話を練習する

【会話－3】のパターンで助言を求める会話を、今度は助言者がマークを見ながら助

言する、という形で行う。

【5】応用

① 「～んですけど」という形で助けを求める練習をする

助けを求めるときにただ「～した」と言わずに、「～んですけど」を付けるえん曲な頼み方がある。柔らかな印象を与えることができる便利な表現なので、使えるようにしたい。

*レベルⅠの学習者には、これは要求しなくてよい。

会話テープと絵や写真を併用して、この表現を使った助けを求める場面例を提示する。

例 A: このドア、開かないんですけど。

B: 押してるんでしょ、引いてみたら？

これはできるだけ多く用意して、自然なイントネーションのものをたくさん聞かせる。そのそれぞれについて、絵だけを見て、何と言えよいか言わせて理解を確認した後、教授者についてリピート練習をする。このとき、イントネーションが押し付けがましい調子にならないよう注意する。

② 「～てみたら」の形で助言を与える練習をする

【2】② (P102) の展開のところでこの形の助言を聞き取る練習をした。ここでは、①の様々な場面での「～んですけど」にこの形を使って答える練習をする。絵カードを見せて、どうすればよいか聞き、出てきた答えを板書して残す。説明3 (教科書P129) を読ませるなどして用法を確認し、板書したものを「～てみたら」の形に変えさせる。

*ここでテ形が定着していないようなら、形の練習をする。方法は〔会話-1〕の【4】③ (P105) を参照。レベルⅠの学習者には「～てみたら」の各々の表現を聞かせ、その表現の表す絵と結びつける反復練習をする。

その後、「～んですけど」「～てみたら」のやり取りをさせる。「～てみたら」の形はごく親しいもの同士や目上から目下に助言するときの言い方なので、この練習では「～てみたらどうですか」としておいた方が使える範囲が広いだろう。

③ 「～ないと」を聞いて理解する練習をする

この表現自体は、助言というよりは「～しないと悪い結果になるぞ」という意味合いのややきつい表現である。「～なきゃ」という類似した表現もある。同居人から注意を

受けるような場面でも、この形が頻出する可能性があるので、ここでは聞き取り理解に重点を置いて練習させる。こうした表現に慣れておくことは、助言内容を正確に聞き取る上で必要である。

*この形は本文では会話の終わりに出てきて、これを聞き取って答えるという対話がないので、本文の流れで練習するよりは、この形だけを取り上げた会話の流れを設定してここで取り上げるとよい。

説明5（教科書P 130）などで用法を確認した後、洗濯の場面に出てきた語彙を「～てみたら」から「～ないと／～なきゃ」に変えて、母親が先に注意してきた場合の会話テープを聞かせ、「～てみたら」と「～なきゃ」を発話する際の口調や心理の違いに気づかせたい。

例 母、夫人が干しているのを見とがめて

母： あら、だめじゃない。^襟はつまみ洗いしなきゃ。

夫人： はあ、つまみ洗いですか。

母： そう、手で洗うの。こうやって。（ジェスチャーで示す）

夫人： あ、洗濯機ではだめなんですね。

〔会話－4〕助言を求める（2）

行動達成目標	
① 洗濯の結果、陥った困難な事態について説明し、助言を求めることができる。	
② 受けた助言を聞き取り、受け入れることができる。	
知識	〔会話－3〕と同じ。
表現	① 陥った事態を説明できる。 →（ごわごわになっ）ちゃったんですけど。
	② 助言を与える表現を理解する →（ソフロンを使う）といいですよ。 ことができる。

● 準備

- ① ごわごわになったタオルや縮んでしまったセーターなど（学習者にも持参させる）を用意しておく（〔会話－3〕の準備で集まった物の中で、この会話に使える物を選んでおく）。
- ② 上の衣類の状態を表現できるような擬態語を含めた語彙表（ごわごわ／ぼろぼろ／

よれよれになった、伸びた／縮んだ、穴があいた等。レベルによって量を加減し、授業までに覚えて来るよう指示する)を用意しておく。

③ 洗濯補助剤の実物を用意しておく。

● 授業

【1】導入

① 会話の流れを理解させる

テープを聞かせ、内容の理解度を確認する。

例 ・夫人が洗濯したタオルはどうなってしまったのか。

・夫人はだれに助言を求めたか、母親はどうするといいと言ったか。

・ソフロンとは何か。

・それはどこにあると母親は言ったか。

*今までの会話と同様、重点はこれから練習しようとする会話の流れを把握させることにあるので、理解が不十分なら、中国語訳を聞かせたり読ませたりする。

② 語彙を導入する

語彙表の中でも擬態語は、語感をつかみにくいものなので、実物を見せて、こういう状態をごわごわと言うのだと説明した方が効果的である。動詞では「縮んだ」「穴があいた」「伸びた」等が挙げられる。

*レベルⅠの学習者は、これらの語彙は聞いて分かればよい。

【2】展開

① 「～ちゃった」等を使って事態を述べる練習をさせる

「～ちゃった」の意味・用法を説明2(教科書P 131)で確認する。ただし、予想外の結果に終わったことを表すのに、この表現を使わない地域では、その地域で使われている表現の方を学習した方がよいだろう。

*この表現を使わない地域でも、レベルⅢの学習者には、標準語の縮約形として、「～ちゃった」を導入しておいて構わないが、レベルⅠの学習者では使用する機会のない表現で負担を増すことは避けたい。

衣類を示して「ごわごわ(ぼろぼろ)になっちゃった」「縮んじやった」「伸びちゃ

った」等と教授者の後についてリピート練習をする。

*レベルⅠの学習者にも、ごわごわ／ぼろぼろぐらいは言わせる。

- ② 「～ちゃったんですけど何かいい方法ありませんか」を使って助言を求める練習をする

発話練習をした後、手にした衣類について説明をさせて、教授者に助言を求めさせる。

*レベルⅠの学習者は、事態を相手になんらかの形で伝えることができればよい（単語の羅列、ジェスチャー、指さし等）。

- ③ 助言を与える「～するといいですよ」を聞き取る練習をする

「～ちゃったんですけど何かいい方法ありませんか」に対して教授者は「～するといいですよ」の形の助言をする。練習は〔会話－3〕【2】の②～⑤（P102～104）の手順になぞらえて行う。

【3】総合

- ① 通しで助言を受ける過程を練習する

〔会話－3〕の【3】①（P104）と同様、一人ずつ衣類を持たせ、助言者（教授者）と会話をする。

*これも、可能ならば、洗濯に詳しいボランティアに助言者役を依頼したい。

このときの重点は、㊦その衣類がどうなってしまったのかを伝え、㊥助言された内容を聞き取り、㊧その内容を理解した旨を助言者に伝えることができることの3点である。助言をするときは、「～するといいですよ」の形のみでなく、「～てみたら」「～しなきゃ」など様々な表現形を折り込んで、理解度を測る。

*学習者同士で行ってもよいが、レベルⅠの学習者に助言する役をさせることはない。

【4】応用

- ① その他の場面で「～ちゃったんですけど」を使い、助言を求める練習をさせる

実物を使うと効果的である。取っ手の取れたカップ、欠けた茶わん、短くなった鉛筆、破れたタオル等を示しながら、取れた／欠けた／短くなった／破れた等の語彙を導入する。

＊練習 2－2（教科書 P 132）の用例も絵カードにするなどして使える。

「～ちゃったんですけど」の形で口慣らしをした後、一人に品物を持たせて「これ、取れちゃったんですけど／欠けちゃったんですけど」等と言わせる。

＊「割れる／割る」「壊れる／壊す」等は、自動詞・他動詞の区別のない中国語話者にとって二つの使い分けは非常に難しい。二つを対照させて混乱させるよりは、「この場面ではこう言う」としておいた方がよいだろう。ただし、自分の不注意でタオルを破いてしまったようなときに「破いた」と言わずに「破れた」と言うのと、責任逃れの発言と取られることがある。レベルⅢの学習者には二つの使い分けもこうした例を挙げて指導しておきたい。

② 助言を与える表現を練習させる

①の訴えを一人が行い、残り全員で「～てみたら」、「～するといいですよ」などの表現を取り混ぜて助言させる。できれば、ここで教授者も実際に役に立つ生活情報を提供したい。

〔会話－5〕トラックに泥をはねかけられる（1）

行動達成目標	
① 出会った災難の状況について尋ねられたとき、説明できる。	
② 助言を聞き取って、受け入れたことを伝えることができる。	
知識	〔会話－3〕と同じ。
表現	① 出会った災難の状況について説明できる。 →（ひっかけ）られたんですよ。
	② 助言を与える表現を理解することができ →（洗っ）た方がいいですよ。 る。
	③ 助言を受け入れたことを表現できる。 → ええ、そうします。

● 準備

- ① 路上で出会う様々な災難の状況が見て分かるような絵や写真（実際に泥をはねかけられたズボンなどが入手できればなおよい）を用意しておく。
- ② 上記の状況を表す語彙表（泥をひっかけられる／犬にかまれた／上からペンキが落ちてきた／ブランコから落ちた等）を用意しておく（学習者のレベルによって量を加減し、授業までに覚えてくるよう指示する）。
- ③ 上記の災難に出会った人への助言に使う語彙の絵カード（洗う／医者に行く／ふく等）を用意しておく。

● 授業

【1】導入

① 会話の流れを理解させる

会話テープを聞かせて、理解度を確認する質問をする。

例 ・林さんはどうしたのか。

・林さんはどこで山本さんに会ったのか。

・山本さんはどんな助言をしたのか。

・林さんは助言に対してどう答えたか。

② 会話場面について話し合い、語彙を導入する

学習者と、これまでに会った路上での災難について話し合いながら、語彙を導入し、発話練習をする。

【2】展開

① 出会った災難について説明する練習をする

絵カードや写真を示して、「どうしたんですか」と尋ね、「～たんですよ」と答えさせる。ここの「(ひっかけ)られた」は文法的には受け身の表現であるが、ここで受け身の練習をすると、場面と離れてしまい、学習者を混乱させるおそれがあるので、受け身の練習は別に時間を設けて行う。ここでは、例えば「犬にかまれた」であれば、犬のほか、猫でも猿でも動物の絵などを使って、「～にかまれた」の置き換え練習をして、この形のまま覚えさせる。

「～たんですよ」がスムーズに言えるようになったら、次のような練習をする。

例 A: どうしたんですか。

B: ～たんですよ。

A: そうですか、ひどいなあ。

「そうですか」の後に「大変でしたね」「ひどい目に遭いましたね」等適切な表現による合いの手を入れさせる練習をする。

* その際、前もって語彙表を渡しておくといよい。

* 本文で出てくる「よけようとしたんですけど」の文はこの場面に不可欠ではないし、「～よう」「～ようとした」という表現を理解させるためには意志や意図を表す、より単純な場面を設定した方がよいと考えられるので、この表現の練習は、ここでは取り上げない。

② 「～た方がいいですよ」を聞いて理解する練習をする

この形も助言を与える表現の一つとして、聞き取り練習をしておく。「洗った方がいいですよ」のほか、助言としてよく用いられる表現、「医者に行く」「着替える」「ふく」等の絵カードや写真を示し、「～た方がいいですよ」の形にして発話練習をする。その後、一人に一枚ずつ「災難」の絵カードを割り当て、教授者が「～た方がいいですよ」と助言を与える。方法については、〔会話－3〕の【2】②～⑤（P102～104）を参照のこと。

*レベルⅠは、音を聞いて、該当する絵カードを指すなどして、聞き取り練習をする。

③ 「ええそうします」と「じゃ、そうします」の違いについての練習をする

②に続いて、聞き取った助言を受け入れたことを示すこの表現の口慣らしをする。自分もそう思っていたときは「ええ」、それ以外のとき（大部分はこれ）は「じゃあ、そうします」が自然だろう。

しかし、この使い分けのための説明を中国語なしで行うことは困難であるし、使い分けができないことはこの場面では致命的なことでもないので、「はい」で答えさせておいて差し支えないと考えられる。

*しかしできればレベルⅢの学習者にはこの使い分けもできるようにさせたい。

【3】総合

① 会話全体を通してロールプレイをする

【2】①～③（P111～112）を通してロールプレイをする。重点は㊦説明ができ、㊩助言を聞き取り、㊪受け入れたことを表現できることの3点である。

*この会話もレベルⅠの学習者に助言する役は教授者が演じ、学習者にはやらせない方がよいだろう。

【4】応用

① 受け身形の聞き取り練習をする

受け身形は、教室内での説明や練習だけでは、適切に使えるようにすることは難しいだろう。ここでは、聞き取りに重点を置く。説明1（教科書P134）等で用法をとりあえず確認したら、絵カードや写真などを示しながら練習1－2（教科書P135）にあるような用例を「～に～られた」の形で聞かせる。このとき出た受け身形を板書しておき、

後で、それらについて辞書形を言わせるか、教授者が示すかする。次に絵カード等を用いて例えば練習1-2の1なら「先生は叱ったのか、それとも叱られたのか」と尋ねていき、さらに「だれが叱ったのか／だれが叱られたのか」と尋ねて、答えさせる練習をする。

*レベル1の学習者には、受け身形の練習を無理にさせるよりは、用例にあるような基本動詞の意味をしっかりと定着させる練習をさせたい。「だれが見たのか／だれが泣いたのか」と聞いていく。ただし、本文で取り上げた「犬にかまれた」との間に混乱するおそれがあるので、「かむ」のところは「何にかまれたのか」で通した方がよいだろう。

② 受け身形を使った会話練習をする

受け身形の発話練習をしてから、①の用例を使った会話練習をさせる。絵カード等で状況を設定し、二人でロールプレイをする。

例 B: (黙ってふくれっ面をしている)

A: どうしたんですか。

B: ～に～られたんです。

③ 「～た方がいい」を使って助言をする練習をする

この形も、「～てみたら」や「～するといいですよ」等と同様、いろいろな状況を設定し、まず聞き取り練習をする。

例 医者から患者への助言

- ・たばこ、やめた方がいいですよ。
- ・早く寝た方がいいですよ。
- ・お風呂に、入った方がいいですよ。

ふろに入っている人の絵と入るのを拒否している人の絵とを見せて、「入った方がいい／入らない方がいい」で聞き取り練習をしてから、教授者がどちらかを言い、学習者に絵を選ばせる。その後、「こういうときは～した方がいいですか、それとも～した方がいいですか。」と尋ね、学習者に答えさせる。また、教授者または学習者の一人が病気であると仮定していろいろ助言をさせる等してもよい。

*レベル1の学習者は聞き取り練習だけでよい。

④ 様々な助言の表現形を使い分ける練習をする

ここでこれまでに出てきた助言に使われる表現形をまとめておき、適切に使えるよう

練習をする（この練習は特にレベルⅢの学習者のために行い、レベルⅠの学習者には必要ない）。「～なきゃ」が「～なきゃいけない」という他の可能性の存在を認めない強い言い方であるのに対して、「～た方がいい」は「他のことをするよりは～した方がいい」といった相対的な勧めであり、「～といいですよ」は「～」しないとまずいということはないが、「～」することがよりよい結果を生むことを経験で知っている者の勧めである。「～てみたらどうですか」はこれらの表現の中では最も中立的な表現であると考えられる。

これらのうちの一つだけを使うことを要求される状況やこれらのうちの一つの表現は使うと不自然であるような状況をいろいろ設定して、助言させる。

例 路上で人が車にひかれて倒れている。

「救急車を呼ぶといいですよ」は悠長すぎる。三つのどれかを選ぶとすれば「呼ばなきゃ！」がよいだろう。

⑤ ウ／ヨウ形の練習をする

* ここの手順は②の受け身形（P113）のときと同じ方法を挙げた。

用法を説明2（教科書P135）等で確認して、基本的な動詞について話し手の意志を表す用例を絵カード、写真等を示しながら聞かせる。このとき出したウ／ヨウ形は板書しておき、後でその各々について辞書形を言わせる。次に、ウ／ヨウ形を聞いて絵カードを指す形で聞き取り練習をさせる。スムーズにできたら、絵カードを見てウ／ヨウ形で表現させる。これも問題なければ、今度はこの形の出そうな状況設定をして、言う練習をする。

例 腹をすかせた人 → 食べよう

眠そうな人 → 寝よう

〔会話－6〕トラックに泥をはねかけられる（2）

行動達成目標

異なる人による相反する助言の中から、自分と助言者との関係を考慮してどの助言を受け入れるかを選ぶことができる。

- | | |
|----|---|
| 知識 | ① 日本家庭での一般的な主婦の地位・発言権について理解する。
② 泥をはねられた場合の処置法について、どういうものがあるか知る。 |
|----|---|

表現	① 自分と異なる意見を言われたとき対処 → あ、そうですか。 できる。 (イントネーション注意)
----	---

● 指導の前に

この会話では、林さんの母親が同じ泥はねに対して〔会話－5〕と相反する助言をしている。いったん受け入れた助言を否定されて、林さんとしてはあまり気持ちのよい場面ではないかもしれない。しかしこうしたことも日常生活では十分あり得るのでそのような場合の対処の表現として〔会話－6〕を学ぶことにする。

● 準備

助言に使う語彙表（レベルによって量を加減し、授業までに覚えて来るよう指示する）を用意しておく。

● 授業

【1】導入

① 会話の流れを理解させる

〔会話－5〕に続けてテープを聞かせ、次のような質問をする。

例 ・だれとだれの会話か。

・林さんはすぐどうしようと思っていたか。

・母親はどんな助言をしたか。

・林さんはそれに対して何と言ったか。

・ズボンはこの後、どうすることになったのか。

② 会話場面について話し合う

親族と同居している帰国者がいれば、こうした意見の食い違いを経験したことがあるか尋ねてみる。同居人以外でも、近所の人などとの間での類似の経験についても話させる。「指導の前に」（P115）で触れた事柄に関連づけて話し合いながら説明していく。

【2】展開

① 文を二人の会話で完成する練習をする

この会話のように話し手が言いにくいことを言おうとして、あるいは適当な言葉が見つからなくて言いよどんでいるときに、それを察して続きを引き取り、文を完成すること

ができるのも会話の技術である。

*レベルⅠ、Ⅱの学習者にはこの練習は必要ではない。ただし、自分が言いよんでいるその続きを相手の日本人が引き取って言ってくれたときに、これを聞き取れる必要がある。これができないと、相手の言ったことに無関係に話を繰り返すことになり、相手を見殺した印象を与えかねない。テープでこうした例を聞かせると分かりやすい。

例 林： あの、トラックに……。

母： あ、泥はねられちゃったのね。

林： 泥をはねられたんです（母の言葉を無視して）。

練習としては、【会話－5】で練習した様々な状況の説明を学習者に始めを言わせて教授者が続きを引き取り、それに対して「ええ」とうなづく等して同意を示す形で行う方法などが考えられる。

【3】総合

① （相反する）助言を受ける立場の場面練習をする

*このあたり、役割練習はしにくい展開になっているので、クラスの状況によっては話し合いのみで済ませてよいだろう。

学習者の一人に絵カード等に沿って状況説明をさせ、教授者が「どうすればいいですか」と聞いて処置法を他の学習者にも聞いて出させる。その後、場面を林さんが帰宅したところに設定し、教授者が母親役を演じて先程のものと相反する処置法を助言する。

*役割を分かりやすくするために、エプロンなどの小道具を使うと効果的かもしれない。

ここで、どう対応すればよいかクラスから意見を出させながら、林さん役の学習者に演技させる。このときに、「そうですか」を言わせる。ただし、「そうですか」はイントネーションによって納得を表すものから反論に近いものまであるので注意したい。どういう口調で言うとどんな印象を持たれるかについてできれば中国語で説明しておきたい。